

学籍番号：B3H004

氏名：野口隆子

学位論文題：保育者の専門的発達—幼稚園保育文化と語り

論文審査委員：（主査） 福丸 由佳
無藤 隆
高田 文子
岩立 京子

1. 論文内容の要旨

<問題と目的>

本研究では、日本の保育における専門家集団の文化（本研究では“幼稚園保育文化”に着目する）において、保育者が実践行為の中で志向し価値づける共通の“意味”を語りから検討することを第1の目的とする。第2に、保育の場では様々な経験・価値観を持つ多様な保育者と共に目標を共有し、協働的实践・協働的探求をおこなうことが求められる。日本において、園内研修がその一つの形態であるが、実際に保育者間でどのような語りにより実践的学びが生じるのかを検討する。第3に、保育者の実践の知は、職場集団の文化、同僚性など長期的インフォーマルな関係性の中で形成されるが、そのプロセスにおいて他の保育者から受ける指導・支援（メンタリング）にはどのような特徴があるのか。熟達者（メンター）との関わりを通して専門的発達はどのように促されるのかについて検討をおこなう。

<先行研究のまとめ>

第1章では「教師・保育者の実践知と熟達、専門的発達」、「専門的発達を促す協働の場：園内研修とメンタリング」、「日本の保育文化の志向性と保育的価値」に関する研究を整理し、文化に埋め込まれた保育者の専門的発達のプロセスについて考察した。第2章では、保育実践における言葉と場の特徴について述べるため、「文化的道具としての語り」、「実践の暗黙的・身体的・文脈依存的・即興的・協働的特徴」に関する先行研究を概観し、保育実践の特徴とその言語化や伝達、学びの難しさについて論じた。さらに「保育者のライフコースにおける語り」に関する研究に着目し、特に近年増加しつつある教師・保育者の転機をめぐる語りやライフストーリー・ライフヒストリーに関する研究をまとめ、保育者の専門的発達と語りとの関連性について論じた。第3章では、本論文で想定する“保育文化”とその主体となる保育者集団（本研究では“幼稚園保育文化”とする）について論じた。本論文では保育者という専門家集団に固有で共通性を持った志向性、行為、シンボル、ルールなどのパターン、保育者集団内に埋め込まれた文化的道具を含み“保育文化”と呼び、文化・歴史的な文脈における成果として伝達・獲得されると同時に保育者及び保育に関わる専門家集団による協働的実践・協働的探求の過程において構成されるものであるとしている。

<結果と考察（第5章～第10章）>

第5章から第10章では、各々の研究の目的と方法、結果と考察について述べた。日本の

保育文化で重要とされる保育的価値について検討した。第5章「保育者の持つ“良い保育者”イメージに関する研究」（研究1）では、多声的ビジュアルエスノグラフィーの手法を援用し、保育者合計143名に調査し、保育者が共通に持つ“良い保育者”“良い実践”イメージを明らかにした。第6章「語意味カテゴリーに関する日独比較研究」（研究2）では日本79名、ドイツ63名を対象に、研究1と同様に日・独の保育者が持つ保育観の語りを引き出した。保育者が共通に持つ“良い保育者”“良い実践”イメージの中核は『子ども中心』志向であり、保育者のペースや主導性と対比的に語られることが多いことがわかった。また、子どもの遊びや主体性を尊重する保育においても様々なアプローチがあり、それらが重層的に織りあわされ、特定の文化集団の特徴として意味づけられていくプロセスがあると考えられる。

「教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究—幼稚園・小学校比較による分析—」（研究3）では、保育者計92名、小学校教師101名を対象に、教師・保育者が実践を語る際の語のイメージ比較検討することによって、保育文化・学校文化で求められる専門性の共通点・相違点を明らかにした。保育文化のもつ志向性に対し、小学校の教師は教師側の指導、方向付けを重視し、子どもと直接対話をおこなうことで子どもを理解しようとする傾向があった。「保育者が実践を語る際に用いる語のイメージに関する研究—保育経験による比較—」（研究4）では、保育者合計143名を対象に、若手とベテランの保育経験による専門的知見の特徴を検討した。同一の語に対し保育経験年数によって捉えが異なっているものがあり、特に『長い目で見る』ことや『トラブル』に対する理解において顕著であった。

保育の場における専門的発達とメンタリング（第9章・第10章）は、A園という特定の園の事例である。「保育者の専門的発達における年次的特徴と変化—保育経験と指導・支援に関する語り—」（研究5）では、A園に勤務する保育者全員を対象に5年の間隔をおいた2時点の半構造化インタビューを実施した。保育経験の年次的推移に伴う語りの特徴と各段階で受けた（語られた）指導・支援との関連から特定の園文化における保育者の専門的発達のプロセスを明らかにした。「協働的な探求の場としてのビデオカンファレンス—『朝の会』をめぐる5歳児クラス間比較—」（研究6）では、A園における5歳児クラスの『朝の会』に関するビデオカンファレンスの実践に筆者が参与し、フィールドワークをおこなった。子どもと保育者が共に作り出すクラス文化があること、保育者自身無意識におこなう行為、特に身体的な実践がビデオによって意識され、新たな意味や探求の機会となること、メンターの存在が重要であることが示唆された。

<総合考察（第11章・第12章）>

第11章では、研究結果の整理と得られたられた成果をまとめ、第12章の総合考察では、保育の場における協働的探求として、園内研修（研究）などの実践による蓄積が進みつつある今日の状況において、保育者の専門的発達を考慮した協同的実践・協同的探求の場のデザインモデル、保育者の専門的発達のプロセスに応じたメンタリングモデル、リーダーシップの発達について提案した。

2. 論文審査の結果の要旨

本論文は、保育用語や保育場面のビデオなどに対する印象・連想・推察を保育者に尋ね、

そこから保育ということのとらえ方を明らかにすると共に、特定の園において、その保育実践がどのように改善されていくかを検討したものである。従来、幼稚園の保育者の専門的文化のあり方は種々検討されてきてはいるが、組織的検討は少ない。特に本研究では、実践自体に対して実践について語ることを専門性のもう一つの面として明示的に取り上げ、その検討を進めた。その語りは（養成課程と共に、その後の）研修や自己省察を通して身に付けまた変改されていくに違いない。それは個人としての営み以上に保育者集団の在り方の中で起こり、幼稚園という制度の中で教育され、また研修を受け、さらに各園での語り合いが進められる。本研究はいくつもの研究を通してその語り方・語り合いの様々な様相を分析し、とりわけ、保育者のあり方の良さ・悪さという一つの次元から多次元的で実践の読み取りにつながり、語りと実践的根拠の往復過程があることを取り出すことが出来た。

第1回目の審査会は、2014年11月26日18時に開かれた。保育者の語り方について多くの研究を重ねた労作であることが高く評価されたが、まだ未整理の部分が散見されることや先行研究からの必然性が明瞭でないこと、方法論の記述が大まかに過ぎること、「保育文化」の定義や「語り」との関連の曖昧さなどが指摘され、以上を修正することが求められた。

第2回目の審査委員会は、2015年1月15日18時に開かれた。第1回目の修正要求に従い、良く修正され、構造化により着眼点や成果が明瞭になったと評価された。しかし、なお、「文化」「専門家文化」「保育」「モニタリング」「実践共同体」等の用語の曖昧さが指摘され、その定義と共に、例えば、「幼稚園保育文化」といった焦点化が求められた。それらの修正により、公開審査会に進むことが合意された。

第3回の公開審査会は、2015年2月19日18時に行われた。修正を組み込んで発表が行われ、質疑についても適切な解答がなされた。最終試験では学力の確認を含め、それまでの修正が適切になされたことを認めると共に、誤字などの修正が求められ、それは主査に一任された。その修正がなされることとして、博士論文として合格とされた。